

松枝迪夫編

## 『ある学生寮物語—青春の軌跡100年』

(アドスリー・2001年・1500円)

神奈川大学経営学部教授 松 岡 紀 雄

編者の松枝迪夫さんには、少なくとも3つの顔がある。1つ目はもちろん国際法務や国際取引法を講じる神奈川大学経営学部教授という顔であり、2つ目は40年に及ぶ弁護士という顔である。もうひとつ、最近まで松枝さんが最も情熱を注いできたに違いないと思われるのが、「財団法人上越学生寮」の理事長代行という顔である。上越というのは新潟県上越地方のことだが、同地方から上京してきた青年たちのために設けられた学生寮の誕生から閉鎖に至る約100年間の波乱万丈のドラマ、これが本書のテーマである。

この寮は、夏目漱石が「吾輩は猫である」を発表した明治38年(1905)に、上越舎と呼んで本郷区(現在の文京区)西片町の借家で6名の学生が自炊生活を始めたのが発端という。当時は地方出身者のための学生寮も珍しくなかったようだが、この寮には2つの特筆すべき点があった。

1つは、学生による完全な「自治制」とったという点である。発足の当時、上越出身者のあいだで寄宿舎を設けて舎監をおこうという計画があったのに反発、学生たちだけで一足先に自治制の寄宿舎をスタートさせた。寮生のことを舎生と呼んでいたが、自分たちで入寮者の選考から、食事時間や門限など規則も定め、毎学期運営にあたる各委員を改選していたという。

もうひとつの特徴は、地元の旧藩や自治

体、企業などがスポンサーというのではなく、在京の上越出身者が支援者となった点である。当初は、毎月舎生が在京の諸先輩を訪ねて家賃分の援助を受けて回ったという。明治42年には財団法人を設立し、以後90年以上にもわたってこの学生寮を支援し、運営に当たってきた。

「名誉にも権力にも金にも全く無縁の、この小さな学生寮の僅かの人数の学生の為に、目立たぬ寄付をし、運営のため無償で世話をし、多忙の中寮を訪れて寮生に訓育の話をしてきたことに特色があります」と松枝さんは記している。愛郷心がベースとなっはいるが、日本版のフィランソロピーの記録と見ることもできる。

今ごろなぜこの本が編纂されたかということだが、100周年を目前にした平成12年、遂にこの学生寮の歴史に幕が閉じられることになった。最近の学生が集団生活を嫌ってアパート暮らしを好むようになったこと、さらには昨今の経済事情から建物の修理や維持管理の資金の確保が望めなくなったことなどが指摘されている。葛飾区金町にあった、鉄筋4階建て、50人収容の寮の建物は取り壊され、300坪の土地は葛飾区に一部は無償、一部は有償で譲渡された。この譲渡代金2億円は、上越市に「上越学生寮奨学金基金」として寄付され、財団法人も解散となった。

東大法学部の学生時代に自ら2年間を過

ごし、昭和47年以来財団の常務理事、さらには理事長代行として学生寮に情熱を注いできた松枝さんが中心となり、万感の思いを込めて編んだのが本書というわけである。巻末の年表には、寮の増築や移転、春や秋の旅行、先輩を囲む座談会や工場見学、戦争中の灯火管制で遮光幕を作ったこと、昭和20年の大空襲で炎上したこと、寮歌の制定、新潟大地震の際には寮生全員が駅前で義捐金活動を行って新潟市へ寄付をしたこと、寮の玄関にブロンズ像「少女」を設置したこと、女子大生との合同ハイキングのこと、最後には財団法人の解散、清算に至る手続きなど、実に詳細に記録されている。関係者の並々ならぬ熱情を感じないではない。

時々に寮のあった都内の地名をとって、弓町寮、野方寮、金町寮などと呼ばれるが、これらで青春時代を過ごした学生数は約1000人に及ぶ。本書には延べ100人近くの在寮経験者が寄稿しているが、ほとんどが50周年や60周年など記念誌からの再録である。おかげで初代寮生の綴った体験談まで含まれており、100年近くも昔の寮や学生生活の様子から、戦中、戦後の模様まで、まるで目に浮かんでくるようである。

同じ学生寮の雰囲気が、時代によって大きく異なっているのも自治のなせる業であろう。深酒に始まって、夜間に寮生の寝込みを襲って喝を入れたり、食堂の器具を破壊したり、2階から封筒に入れた尿を道路に撒いたりといった、いささか度を過ぎた蛮行が日常茶飯事だった時代も描かれている。その一方で、昭和の初めの寮生は、「全ての面で規律正しく、婦人の訪問者はたとえ姉妹でも必ず2階の12畳位の応接室にて歓談する事、夜10時門限、各室内でのアルコール類は厳禁等々。万一寮規を乱す者があると寮長は直ちに舎生全員を招集、

制服または袴を着けて集合、多数決で処分したものであります」などという記述も残っている。

本書の頁を繰りながら最も深く考えさせられるのは、教育のあり方である。多感な時代に学生寮で、大学や学部を異にする先輩・後輩が、文字どおり同じ釜の飯を食うことが、人間形成の上でどれほど大きな意味を持つかを思い知らされる。こればかりは、たとえ少人数の演習形式のゼミといえども、とうていかなうものではない。現代の学生の多くがアパートで一人住まいをしている姿が、なんと哀れに思えてきてならない。

考えてみれば、アメリカにしろ、ヨーロッパ諸国にしろ、とくに将来エリートと目される若者は、現在でもほとんどが何年もの寮生活を体験している。その多くは、日本人学生が見ても驚くような狭い部屋で、質素な共同生活である。そうした環境の下で、周囲の人への思いやりや自制心、マナー、幅広い教養を身に付けていくのである。豊かな人間性や社会性、リーダーシップといったものも磨かれていく。

20世紀の日本の社会の姿を振り返り、大学のあり方や学生時代の過ごし方、先輩・後輩の関係などを考えさせてくれる得がたい1冊である。教職員はもちろん、学生諸君にもぜひ読んでほしいと願っている。